

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

## \*ローマで双子育児②⑤\*

浅田 朋子

双子の9歳の誕生日がちょうど休日だったので、家族でローマの EUR 地区(エウル)にある「Luneur Park(ルネウル パーク)遊園地」に行くことにした。

この「Luneur Park」は、関西で言うところの「ひらかたパーク」のような存在で、ローマの人々に昔から親しまれている。歴史あるこの遊園地は、なんとイタリア初の遊園地で、1953年に開催されたローマ国際農業博覧会のために設置され、1960年のオリンピックの際に常設の遊園地となったのである。しかし2008年に近代化、改修工事のために閉鎖され、2016年に「Luneur Park」としてリニューアルオープンした。ローマの人は「ルナパーク」とか「ルネウル」と呼んでいる。

当日、朝から双子は「ルナパーク、嬉しい！早く行こう！！」と興奮気味である。チケットはフリーパスなので双子は「全部乗る～～！」とやる気満々である。夫49歳・四十肩、私48歳・更年期の始まりで精神・体調が安定しない私たちが、数々のアトラクションに耐えられるのか・・と不安になりながらも「うん、楽しもうねえ！！」と大きな声を出して士気を高めた。

遊園地に着くと、夫が目を輝かせて「Che nostalgia!!」(うわ～なつかしい！)と嬉しそうに声を上げた。数十年ぶりに訪れても懐かしさを感じるくらい、雰囲気やデザインは昔の面影があるようだ。徐々にバージョンアップされ最新のアトラクションも設置されているが、昔のアトラクションや

建物も残しているので「なんかほっこり、昭和な感じ」がする。昔懐かしのデザインはどこでも似たような雰囲気がある。

まずは、恐怖度低めの乗り物から始め、徐々に肩慣らしをして、恐怖度・中のジェットコースターに乗った。このジェットコースター、全長も短く、高さも低いし、角度もあまりきつくない。「な～んか、このジェットコースター、全然怖くなさそうやん！」と余裕で列に並んだ。ジェットコースターのスタッフのお姉さんとおばさんは「ちょっとお小遣い稼ぎでバイトしてる近所の人」みたいな感じである。にこやかに仕事は早い、が、適当。

15分くらい待って私たちの番になった。前のお客を乗せたジェットコースターが戻ってくると、スタッフのおばさんは「ドアと安全バーを開けるから、ちょっと待ってね。よいしょっと！」と言うと、エアポンプをジェットコースターの本体に差し込んで、プシューっと空気を抜いて安全バーを上げ、各乗り込み口のドアを開けた。「え？・・安全バー、手でエア抜いて上げるん？」しかもエアポンプ、自転車屋の業務用のタイヤの空気入れにそっくりである。余裕だった気持ちが一気に不安に変わった。双子と夫、他の客は「Saliamo!」(乗りこめ！)と勇み足で我先にと乗り込んでいる。「Saliamoちゃうで。大丈夫かなあ・・」とお姉さんとおばさんを見ていると「あー、またや、また出発の位置がずれてるで！」と笑いながら、「ちょっとー、ファビオ、来てー！」と隣のアトラクションの係の若い男の子

を呼んでいる。客を一旦降ろし、3人で「1、2、3！」とジェットコースターを押して1メートルほど前進させた。「あー、いけたわ。ありがと、ファビオ！後でカフェでも奢ったげるわ！」とおばさんは満足そうに笑った。「安全バーはエアポンプで操作」「位置がずれる」「手動で簡単に動かせる」ことを目の当たりにしても、イタリア人たちは疑問も不安も感じずに「Partenza！」(出発！)と言って楽しそうである。夫を見ても「安全バーをしっかり持っていたら怖くないよー」と楽しそうに双子と喋っている。いや、その安全バーが心配やねん…。日本ではあたり前の正確な作業、安全確認、規則に沿って働くことができないイタリアで、「なんでみんな日本のようにできないんだあ！」と今まで何度叫びそうになったことか。

「うう…、どこを持ってば安全なんだ…」と考えているうちに、ピーとかブーとかいう発信の合図も無しに「Ciao～！」とスタッフの能天気な掛け声で、ガッ！ガタンッ！とすごい音を立てて発進した。

パッと見では分からなかったが、広くない敷地内にぐるぐるとレールがはりめぐらされているので、案外、距離はある。しかも狭い中でカーブや降下するポイントをたくさん作っているの、急降下した後すぐに鋭角なカーブを曲がってまた上って急降下、カーブ、カーブ、カーブ！みたいなのを短いスパンで繰り返すので息が止まりそうになる。安全性に対する大きな不信感と恐怖は、更年期の情緒の乱れをさらにぐちゃぐちゃにし、ただでさえ信用ならない安全バーの間で小柄な双子がぐらぐらと揺れて今にも隙間からするりと落ちそうになっているのを見て「ぎゃー！！双子ー！落ちないでー！お願い！！神様仏様ー！！！」と涙目になってしまった。

実際は大したことはないジェットコースターだったんだろうが、日本人の私は「イタリア人が適当に点検して運営しているアトラクション」ということに完全にマインドコントロールされ、恐怖は100倍くらいになっていた。双子は落下することもなく「ちょっと怖かったけど、楽しかったよ」とニコニコしていた。

お次はちょっと一休みする意味で「Ruota panoramica(観覧車)」に乗ることにした。列の前に並んでいた家族のお父さんが夫と同年代のよ

うで「懐かしいですよー」と世間話を始め、このお父さんが「これは昔からある古いアトラクションのひとつなんだよー。コロッセオくらい古いよ、あはは！」「でもねえ、コロッセオの頃のローマ人の方が技術は上ですよー」「そうですねえ、今のローマ人に立派な建物は作れませんねー」と面白くない冗談と余計な情報をくれたおかげで、また怖くなってきた。しかし、綺麗に塗装された外観からは「しっかり改修されてますっ！」という感じがする。さすがのイタリア人も、街のシンボルとまで言われる巨大なこの観覧車の点検は手抜きすることはあるまい。この観覧車より Acquedotto(水道橋)の技術の方が上で、メンテナンスも素晴らしかった…だなんて考えたらダメだ！と自分に言い聞かせた。



【観覧車】

観覧車のスタッフのお兄さんは色白で痩せていて、なんだか生気がない。スタッフのユニフォームもぶかぶかで、目の下のくまがホラー映画みたくである。だが礼儀正しくて、感じはいい。「やあ…おちびちゃんたち…。観覧車、好き？」と少し微笑んで小さい声で聞いてきた。双子もこのお兄さんの不思議な雰囲気がちよっと怖いのか「…うん」とさっきまでのテンションが下がってしまった。

「さあ、もうすぐ観覧車に乗るよ。動いているから素早く乗り込んでね…何番のゴンドラに乗りたかな…」「あのね、今日誕生日だから、7」と言った。「Auguri..!(おめでとう!)」とパチパチと弱い拍手をしてくれた。「7番ね…あと30分くらい待ってくれたら7が回ってくるから乗れるけど…」。たかが観覧車で30分も待つわけがなく「何番でもいいです」と言って21番に乗った。お兄さんはフツと笑うと「21は7の倍数…悪くないね…数学好き?」と弱々しく手を振って見送ってくれた。

ゴンドラが上にあがっていく途中、急に双子が「ママ、この絵が怖い」とドアに描かれた絵を指さした。黒い線で人が落下する絵が描いてあり、「ATTENZIONE!(注意!)」と書いてある。

落下注意ってことか…。ドアを開けない!とか、立たない!とかならわかるけど、このダイレクトに落下する可能性があるよ!という注意書きが恐怖心を煽る。「ママ、おりたい…」と双子がぐずり出し、「ギィィーッ、ギィーッ」とゴンドラが軋む音を聞いた時に、双子と震えた。一方、夫は「ほら見て、右にある、あのスタジアム。昔、あそこでサッカーの試合をしたなあ」と呑気に景色を見ている。「私たち、すごく怖いんですけど、怖くないん?」と聞くと、「うん、高いからちょっとは怖いかなあ」そうか、あんたにはこの落下の絵や、低すぎるドア、しっかり閉まっていない鍵、ちょっと隙間のある床板とか、なーんにも気にならないんやね…。

ジェットコースターの高速の恐怖よりも、このじんわりなかなか進まない観覧車の恐怖も相当なものであった。やっと地上に着くと、双子は「もう絶対乗らない!!」と怒っていた。

これに懲りたのか、夫が乗りたがっていた古いアトラクションの brucomela(りんごの毛虫)は、「顔が怖いから嫌!」と拒否された。確かに今風のかわいい顔のデザインではないが、昔からみんなに親しまれているミニジェットコースターなので私も乗りたかった。しかし、このおとぼけた顔とは裏腹に思わぬ恐怖が待ち受けていそうな気もするので、「うん、やめとこう」と他の乗り物に移動した。

最新のアトラクションも全て乗り、双子は朝10時から夕方5時までルナパークで一日過ごし、大

満足であった。

最新のテクノロジーを使ったアトラクションのテーマパークもいいかもしれないが、私はこのローマの皆から愛され続ける、大人も子供の頃に戻ったような懐かしさを感じるルナパークが大好きだ。

スタッフの適当さもご愛嬌。細かいことを気にして「神様仏様!」なんて叫ぶことなく、次回は呑気に構えて、おとぼけ顔の brucomela にぜひ挑戦したいと思う。



【brucomela(りんごの毛虫)】

(元当館語学受講生)



## 「一度は死んだ湖」のさかな

竹田 理乃

イタリアをうろうろしていると、まさかそんなことあるわけないでしょと天を仰ぐようなことが三日に一度くらいは起きるものだと思います。公共交通機関の乱れは序の口、ホテルの空調設備を使いたけりや別料金を払え、待ち合わせの相手が2時間遅刻しても悪びれない、公式ホームページでは存続していることになっている施設が閉館していたなど、いろいろありました。それじゃ、今までで一番のまさかそんなことあるわけないでしょ体験はどれだったかと思い返してみますと、オマーニャの観光オフィスで働く女性に「ここに郷土料理はない」と断言されたことのように思われます。それまで、食事処の紹介を求めたら間髪入れずに「飯はここで食べ」と道案内を始めるようなタイプの人とばかり遭遇していたので、実に衝撃的な反応でした。

イタリアを代表する児童文学作家のひとり、ジャンニ・ロダリーの故郷オマーニャは、ピエモンテ州にある小都市です。地図で探す時には、まずミラノの北西にマッジョーレ湖を見つけてください。イタリアで2番目に大きな湖なのですぐにわかります。そのちょっと東側に視線を移すと、やや控えめなサイズのオルタ湖があります。南北に細長いオルタ湖の北端がオマーニャです。湖の北端の端はオマーニャの市庁舎がある広場になっていて、そこからの眺めはまさに山紫水明の趣き。街のざわめきを背にして水面を眺める人の姿がちらほらとあって、のんびりとした雰囲気は漂っていました。日常の気配を押し流すオーバーツーリズムの波のまだ届かない小都市を、しかもスローフード運動で有名なピエモンテ州の片隅に訪ねて、まさか観光オフィスで食文化に関する情報をもらえないだなんて。もしかして冗談でも仕掛けられているのかと食い下がって見たものの、観光オフィスの女性は「寒くなってきたしカボチャがおいしい時期だね」なんて言って肩をすくめるばかり。夕食にお

すすめしてくれたのは、湖に面した立地にあるモダンで無難なピッツェリアでした。

べつに悪口じゃありません。実のところ観光局の女性とおしゃべりは有益でした。このあたりでは列車よりもバスの方が便利らしいということは、前日に立ち寄ったオルタ・サンジュリオの駅のバリスタから聞いて知っていましたが、ミラノに帰るのに便利なルートについての具体的な情報は、ここで教えてもらわなくては得られませんでした。それになにより、会話のなかで観光局の女性がぽつりぽつりとこぼした「よそから働きに来ている人が多くて」や「一度は死んだ湖だから」といったことばは、耳にしてすぐにはピンときませんでしたが、ロダリーの故郷を理解しようと努めるなかで貴重な手掛かりになりました。



【parco della fantasia ビアレッティに関する展示(訪問当時)】

オマーニャを知る日本人はまだ多くありませんが、イタリア好きの日本人でビアレッティ社のモカを知らない人はほとんどいないでしょう。家庭でエスプレッソコーヒーを淹れるときに使う、あの小粋な髭のおじさんが描かれたマッキネッタのことで、オマーニャにアルミ製品を扱う工房を持っていたアルフォンソ・ビアレッティ氏が、蒸気を使うやり方で洗濯をしている女性たちの姿から着想を得てモカを生み出したのが1933年ということなので、1920年生まれのロダリー少年にとっては目新しい地元の発明品ということになります。私にはほとんど縁がありませんが、おしゃれな調理器具で有名なのだとかいうラゴステーナ社とアレッシィ社もオマーニャの企業なのだとか。ものづくりの街なんですね。観光局の女性が「よそから働きに来ている

人が多くて」と言ったのも頷けます。私が小さい頃に住んでいたところも山と川の美しい田舎でしたが、農村観光のパンフレットの挿絵におあつらえ向きの稲の海原の隅っこに、きれいな水を必要とする工場があって、そこで働くためにいろいろなところから人が移り住んできていました。

それにしても、せっかく湖があるのだから、魚料理の出るレストランのひとつくらい紹介してもらえたってよさそうなものです。オメーニャの前に泊まったオルタ・サンジュリオのホテルでは、併設するレストランのウェイター氏のおすすめで、湖で獲れたのだという魚をとともおいしくいただきました。観光オフィスに立ち寄った観光客を納得させるには十分なサジェストでしょう。しかしながら、オルタ湖の歴史をちょっぴりかじってみると、郷土と魚というキーワードを並べて提示された観光オフィスの女性が、なんだかギクシャクした様子で「一度は死んだ湖」なんて不穏なことばを口走ったのもわからないでもありません。

一度は死んだ湖と聞いても、船端や棧橋から緑色に澄んだ水面を覗けば魚影のちらちらする今のオルタ湖を目にしては、どうしても訝しく思われます。ここでなにがあったのかを飲み込むには、まず2021年11月に内田洋子先生の邦訳が出版された『クジオのさかな会計士』を読むのが早そうです。主人公の「私」が、彼の新しく書く小説(と彼の登場しているロダーリが書いたこの短編)の舞台となるオルタ湖のイメージをはっきりと掴むべく、ベッテナスコという街にある棧橋を歩いていると、いきなり湖から人影が上がってきて、自分は魚になるためにトレーニングを積んでいるところなのだと自己紹介します。どうして彼が魚にならなくてはいけないのか。それは彼の愛する湖が魚の棲めないほどの環境汚染に晒され、国内外で「死んだ湖」だと呼ばれているのが忍びないからなのだ、最近ちょっとヒレの生えてきたオメーニャ村の会計士ポラローリ氏は誇らしげに述べます。いささか引き気味の「私」といっしょにポラローリ氏の弁舌に圧倒されていると、なんだか湖の危機が我がことのように思えてきます。

国内外で「死んだ湖」と呼ばれるほどの環境汚染は、オルタ湖の南岸にある地域でレーヨン繊維の製造工場が稼働を始めた1927年に端を発しま

す。銅やアンモニアなどが流れ込んで水質が急激に悪化し、魚どころかプランクトンまで生きられなくなった湖の生態系は完全に破壊されました。第二次世界大戦やその後の復興期を経て、水質改善計画がやっと動くようになったのが1980年代のこと。長い時間を「死んだ湖」のまま過ごしたオルタ湖が、今では水辺のレジャーで観光客を誘致し、地元で獲れた魚をディナーにおすすりできるようなったのですから、これは環境汚染から立ち直った大成功例でしょう。1920年代以前にあった豊かな漁業文化が一度は途絶えてしまって、今、悠々と泳いでいる魚たちは新しく作り直された生態系に属するものだとしても、観光オフィスの女性はそれを堂々と教えてくれたらよかったです。オルタ湖を諦めなかった人たちの愛情と信念、行動力が育んだものには大きな価値があります。



【『クジオのさかな会計士』表紙】

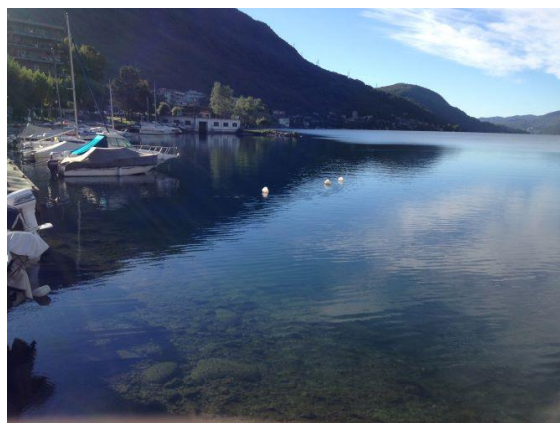
出典: [https://honto.jp/netstore/pd-book\\_31254984.html](https://honto.jp/netstore/pd-book_31254984.html)

オメーニャのピッツェリアも悪くはありませんでしたが、やはり軍配を上げたくなるのはオルタ・サンジュリオで食べた魚料理です。その夜に出していただいたオルタ湖の魚は、おそろしく大きな白身のフライで、表面についていた粗目のパン粉が

キツネ色に揚がっていて香ばしく、半分に切って添えられていた小さめのレモンをギュッと絞ると、淡白な味わいのふっくらとした身に華やぎが備わり、こんなに量があつてはいつまでも食べ終わらないんじゃないかと不安だったのが、いつのまにかペロッと平らげてしまえたほどよく合いました。デザートまでしっかり食べたはずなのに、白身魚のフライのことしか思い出せません。白ワインをグラスで頼んだことは、舌より目が覚えています。私のほかは誰も宿泊客がいなかったせいで、結婚式もできそうなほど広いレストランががらんと静まり返っているなか、真っ暗に夜の帳が降りて黒い鏡のようになった大きなガラス窓とその手前に置いたワインのグラスに、照れちゃうほどムーディなロウソクの黄色い光が入っていてきれいでした。

オルタ湖を舞台にしたロダリーリの作品のうち、最も有名なのは『二度生きたランベルト』でしょう。晩年に書かれたこの作品の発表は1978年のことです。病に苦しみ、死の恐怖に怯えていた主人公ランベルトが、他者に名前を呼ばれることで発動する魔法によって命を取り戻し、二度目の人生を謳歌するために勇んで旅立つハッピーエンドは、まるでオルタ湖の再生を祝福しているかのようです。ランベルトと同じく死から逃れたオルタ湖が、ますます多くの人からその名前を呼ばれ、未永く愛され続けるように、この先ずっと健やかであるようにと願ってやみません。

あ、ついでにもうひとつ願っていいのなら、郷土のお菓子のひとつも教えてもらえたら嬉しいのですが、ぜひ、次に訪れたときにでも。



【オルタ湖畔】

<参考文献・情報>

『クジオのさかな会計士』内田洋子訳、講談社、2021年  
『ランベルト男爵は二度生きる』原田和夫訳、一藝社、2012年  
ビアレッティ社：  
[https://www.bialetti.com/it\\_en/la-storia](https://www.bialetti.com/it_en/la-storia)  
アレッシィ社：<https://alessi.com/>  
ラゴステイーナ社：<https://www.lagostina.jp/lago-d'orta-operazione-`liming`-per-acque-pulite>：  
<https://www.cnrweb.tv/lago-dorta-operazione-liming-per-acque-pulite/>  
La Sòtola #9 - Il lago d'Orta inquinamento e rinascita  
<https://youtu.be/Zp-ybYAj9c8?si=TGy3iwdqQS2DZgzj>

(元当館語学講師)

<冬の無料体験レッスン>

1月からの新学期に先だって、無料体験レッスンを開催いたします。この機会にぜひ新たな世界への扉を開けてみましょう！

●イタリア語無料体験(初心者向け)

京都本校： 1月10日(水)11:00  
1月13日(土)11:00

四条烏丸： 1月15日(月)19:00

大阪梅田校： 1月16日(火)19:00

●イタリア語無料カウンセリング(経験者向け)

京都本校： 1月13日(土)14:30～

●スペイン語無料体験(初心者向け)

京都本校： 1月9日(火)11:00

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: [centro@italiakaikan.jp](mailto:centro@italiakaikan.jp)  
URL: <http://italiakaikan.jp/>